

よろこびあふれる心

ウォッチマン・ニー

8月1日

(神は)キリスト・イエスにおいて、ともによみがえらせ、ともに天の所にすわらせてくださいました【エペソ 2:6】

贖いとは二つの頂きに挟まれた谷にたとえることができます。人が、片方の頂きから降り、反対側の頂きに上るときは、谷の一番低い部分で贖いと出会います。人は墮落し、人は神から離れました。そして、人は神の永遠なる目的から、あまりに遠く、離れてしまいました。その目的とは、二つの頂きを結ぶ直線に当たります。贖うとは、ただ、人がこれ以上、落ちないように手助けし、上に支え上げることを意味します。

イエス様がこの世界に来られ、死に、そして、甦ったので、人はもはや、下に落ちてゆくことはありません。神を讃えましょう。贖いによって私たちは神の永遠の目的へと戻ることができたのです。神が、天地創造の際に成し得なかったこと、そして、人が墮落の際に失ったものの全てが、贖いによって取り戻されました。キリスト・イエスにある贖いが、私たちが本来の居場所に戻したのであり、ここでは神の清算は済んでいるのです。

8月2日

あなたの立っている場所は、聖なる地である【出エジプト記 3:5】

モーセの幕屋は、荒野の中でしかるべき場所に置かれました。そこでは、神が、移動式の幕屋の中、聖徒たちの間に住まれ、定まった場所を持たず、定住することはありませんでした。これに対して、ソロモンが神のために、自分の国の都、エルサレムに建てた神殿は、動くことがなく、建てられたところに、とどまっていました。このうち、ひとつが今日の教会、もう片方が、神の御国における教会です。今日、私たちにあるのは、熱心な、幕屋が表わす、来るべき日の教会だけです。神殿においては、すべては新しくしたのです、新しい祭壇、新しい洗盤、新しい食卓、新しい燭台、新しい香の壇がおかれていました。しかし、新しくないものがひとつありました。そこに安置されるために運び込まれたあかしの箱です。また、他の全てのもので神に更なる栄光を与えるべく、大きく作られた中、大きくできないものがひとつありました。それが箱、神の御子の証しです。その方こそ、『きのうもきょうも、いつまでも、同じ』お方です。

私は、砂漠の砂が敷かれた、幕屋の床のことを考えるのが好きです。それは、神の前の聖徒としての、私たちの人生にぴったりの場面です。まさに、今日ここで、私たちのほこりだらけの足から、キリストの証しが生まれることになるのです。

8月3日

聖霊が、鳩のような形をして、自分の上に下られるのをご覧になった【ルカ 3:22】

大洪水の後で、放たれたノアの鳩は安息の地を見つけることができませんでした。しかし、キリストの洗礼の後、御霊の鳩は地上に降りて羽を休め、主の上にとどまりました。注意してください。ハトは、主の上にとどまったのであり、主から離れて私たちの上にとどまったではありません。私たちは、キリストを通して、御霊を経験します。それは主が、父を心から喜ばせることのできたただ一人のお方だからです。

主イエスから離れて、私たちは洗礼の水から再び、上がってくることはありません。洪水の中、私たちを、安全に運んでくださるのは主であり、また、墓の中から新しい人生へと引き上げてくださるのも主です。自分だけでは、御父を喜ばせることはできなくても、私たちは主に受け入れられています。そして、私たちも、油注がれたもの、すなわち、キリストの中に見いだされることがなければ、聖霊に油を注いでいただけません。キリストをかしらとしていただいている私たちは、御霊の油を注ぐ力を知っています。

8月4日

また、私の神は、キリスト・イエスにあるご自身の栄光の富をもって、あなたがたの必要をすべて満たしてください【ピリピ 4:19】

神を信じている人は、外に出て行って、主のために働かせるようにしなさい。信じていない人は、家から出さないことです。働きをするための第一の条件を満たしていないからです。キリスト者である働き手に定まった収入があれば、はたらきのためにより多くの時間をとれるので、よりよい働きができると、誰もが思っていることでしょう。しかし、実際のところ、霊的な働きにおいては、定まった収入はない方がよいのです。そのほうが、神との緊密な交わり、主の御心の絶えざる啓示、そして、神からの助けが、なくてはならないものとなるからです。

神は、働き手が、金銭的な面で助けを求めてくることを喜ばれます。そうすると、彼らが、主との緊密にな交わり

の中で働くことを余儀なくされ、また、常に主に信頼し続けることを学べるからです。固定収入があっても、それは、神への信頼、神との交わりを育むことはありません。しかし、生活に必要なもののすべてを主に完全により頼むことで、間違いなく、それは育まれます。

とも喜ばせることもできないと、それまでの人生を通じてははっきり理解できたからです。聞き従うことだけが、主に絶対的な榮譽を帰す道です。従順とは、神の御心を中心に据えることだからです。

8月5日

わたしはあなたが横たわっているこの地を、あなたとあなたの子孫とに与える【創世記 28:13】

神がヤコブに言われたことはどうでしょう！これをヤコブの生涯の終わりに言われたのなら、それほどの驚きはないでしょうが、まだ、人生は始まったばかりだったので！その時はまだ、生まれた時からのずるがしこい性格のまま、悪巧みばかりしていたヤコブに、この大きな祝福が与えられました。なぜ、こんなことが起こったのでしょうか？

それは、神ご自身が知っておられたからにほかなりません。この後でご自分が、この男をどのようにされるか、神は知り尽くしておられました。神はヤコブがご自身に信頼しきっていること、その手を放すことができないこと、そして、いつの日か、主に榮譽を帰す器となることをご存知でした。『あなたに与える』と主は言われました。ヤコブがすべきことは何ひとつありませんでした。このように自信にあふれた神はなんと素晴らしいことでしょう！神が望まれていることはご自身の中にあり、私たちの中にはありません。神にできないことは何もないと、心から知ることができますように！

8月6日

見よ。聞き従うことは、いけにえにまさり、耳を傾けることは、雄羊の脂肪にまさる【第1サムエル 15:22】

神が人に要求することの中で、最大のものは、十字架を背負うことでも、仕えることでも、捧げものをする事でも、自分を否定することでもありません。人に対する最大の要求は従うことです。

ここで、サウルが捧げたのは、レビ記の中で、かおりの火によるささげ物と呼ばれているものです。これは罪とは何の関係もありません。罪の捧げものは、主へのかおりの火によるささげ物と記録されたことはないからです。こういったものは、神に受け入れていただき、また、御心を満たすために捧げられました。では、なぜ、サムエルは、捧げ物をするより、聞き従う方がよいことだと、ここで語ったのでしょうか？それは、捧げものの中にさえ自分の思いが入り込むことがあり、それでは神に榮譽を帰すこ

8月7日

子は、父がしておられることを見て行なう以外には、自分からは何事も行なうことができません【ヨハネ 5:19】

主イエス様のように、私たちもまずは神の言葉を聞いて仕え、それから、自分が話したり、行動を起こすべきです。神の臨在の中に生き、神から学ぶものだけが、本当に神のことを語る資格があるのです。共に神に仕える仲間の皆様に率直に言わせていただけるなら、私たちの多くが今日、犯している間違いは、あまりに大胆、あまりに厳格、また、あまりに高圧的であることです。神から聴いてもないことをあえて語ることもあります。しかし、何の権限があってそのように語るのでしょうか？そのような権威を誰からいただいたのでしょうか？私たちのどこが、他の兄弟姉妹より優れていると言うのでしょうか？

権威は神一人にあるもので、他の誰にも与えられていません。神から賜った権威を行使しようとする人はまず、主の臨在のうちに生き、常に主と交わりを持ち、主の心を知るすべを学ばなければなりません。そうやって初めて、自分ではなく、神の権威によって考えることとなるので、その言葉は他の者を豊かにし、押しつぶすことはありません。

8月8日

私は、感謝をささげています。なぜなら、キリストは、私をこの務めに任命してくださったからです【1テモテ 1:12】

アロンの家の者だけが神に仕えることを認められていた時代がありました。そこに無理に入り込もうとすれば、誰であろうと、直ちにイスラエルから切り離されました。実は今日も、ある一家族に属するものだけが主に仕えるべく聖別されています。神に感謝しましょう。キリストを信じる私たちは、誰でもその家族の一員なのです。

はっきりしていることがひとつあります。人が、神に仕えようと決めて、自分を聖別するものではありません。神が人を選び、ご自身のために周りから切り離すのです。全てを投げ打って仕えているから、自分は神に良いことをしていると考える人は、聖別の真の意味をよく分かっていません。私たちは神に仕える榮譽のために選ばれた

のです。これが聖別の意味するところです。選ばれた私たちは、自分を犠牲にする覚悟よりも、栄光ある特権を受けたという気持ちで満たされています。

8月9日

わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています。それゆえ、あなたがたは行って・・・【マタイ 28:18,19】

この広い世界には、少なくとも一群の人々がいて、彼らは主に服従することによって、神の権威を高く掲げています。国々が主に反逆して騒いでも、一つの体である教会は、天の御国を統治し、つかさどる、主の権威を述べ伝えていきます。教会がこの地上におかれる目的は、福音を述べ伝えて、キリストへと成長することだけではありません。教会はまた、神の絶対的な統治を示すためにここにあるのです。

教会とは、国家の対極にあるものです。国家は互いに論じ合っては、『さあ、彼らのかせを打ち砕き、彼らの綱を、解き捨てよう』と述べて、神と、油注がれた者と共に背を向けます。これに対し、喜びのある教会は、主にしっかりと結び合わされて、真の従順を学ぼうとしていることを、高らかに宣言します。主に従うことは、教会のいのちです。私たちにとってはどうでしょう？

8月10日

というのは、キリストの愛が私たちを取り囲んでいるからです【2コリント 5:14】

『取り囲まれている』とは、固く抱き留められているとか、周りを包囲されて、どこにも逃げられないことを意味します。人が愛によって動かされているとき、そのような情熱を経験します。愛がその人を縛るのです。

したがって、愛が聖別の根本となります。キリストの圧倒するような愛を感じることにし、自分を神に対して聖別することはできません。この愛を知らなければ、聖別について語っても無益なことです。しかし、一度それを体験すれば、私たちはすぐに自分を主に捧げることができます。主は罪人である私たちを愛したがゆえに、ご自身のもとへと買い戻してくださり、そのためにご自身のいのちと云うこれ以上はないほど大きな代価を支払われました。私たちを取り囲んでいる愛がそのような愛であれば、どうして、私たちも心の底から、その愛に真摯に応えないでいられるでしょう？

8月11日

しかし、御霊の実は…自制です【ガラテヤ 5:22-23】

このリストの一番最後にあげられたものは自制です。したがって、これはキリスト者の霊的な歩みの頂点に来るものです。聖霊による私たちの統治と、よく言われますが、それは、主が私たちのあらゆる部分を直接、支配されるということではありません。この誤解はキリスト者を、受け身の姿勢へ、もっと悪い場合は、欺瞞へと誘い込んできました。その終点に待っているのは、絶望です。しかし、御霊が人を自制へと導いてくださると知っている者は、霊的な成長へと向かう道を進んでいます。

信じる者となった私たちの新しい心を通して、御霊が支配されます。創造における神の目的は、人間を完全に自由な意思で行動するものとするのでしたし、贖いの目的も全く同じでした。キリスト者は機械のように神に盲従することを要求されてはいません。人は、神の御心を、自分の意志で、進んで満たす特権を与えられています。新約聖書に書かれているさまざまな責任を、果たすことも拒否することも完全に自由なのです。それはいのちと敬けんさにおける責任であり、もし、自分の意志でその働きを、神がすべて滅ぼそうとされるなら、そこには何の意味もありません。肉か御霊か？ 選択するのは私たちです。そして御霊の実は自制なのです。

8月12日

自分を捨て、日々自分の十字架を負い、そしてわたしについて来なさい【ルカ 9:23】

聖書の中で、私たちはキリストと共に、『十字架につけられた』と言われていますが、それは罪との関係で起こったことではありません。罪からの開放とその成果は、私たちにとって既に完成された事実です。それを実現するために、人は何も要求されていないのです。どのみち、何もできないからです。人間がすべきことは、ただ信仰を持ち、キリストの働きが、既に十字架で完成されたと認めるだけです。そうすることで、人はその死から収穫を得るのです。

聖書はこう語っています。十字架を取り上げるのは、自己を否定すると言う意味があり、そして、これが私たちの変わらざる態度であるべきです。主イエス様は数回にわたって、自分についてくるように語っています。ここで説明されているのは、神は私たちの、『罪』と、私たちの『自己』に完全に異なったかたちで対処して下さることです。罪を克服するには、信者はただ一瞬でこと足ります。自己を否定するためには全人生が必要です。主イエス様は、十字架の上でただ一度だけ、私たちの罪を背負われたのに対し、自己を否定することには全生涯をかけま

した。私たちにも同じことが言えます。すなわち、自己の否定は、主とともに長い時間をかけて経験することです。私たちは日々、主に従います。

8月13日

私は…涙ながらに、あなたがたに手紙を書きました【2コリント2:4】

よく知られているように、コリント人への第一の手紙が書かれたのは、パウロがクロエの家の者から、教会の内部に深刻な状況が生じていると聞いたためです。その手紙の中でパウロは、彼らの多くの間違いを直接的、かつ、厳しい言葉で非難しました。この中で、パウロは、その手紙を大きな心の嘆きから、涙ながらに書いたことを語っています。

絶対に確かなことがひとつあります。言葉で人の心を打ちたいと望むなら、自分がまず、傷を負わなければなりません。あなたが先に、内なる怒りを覚えなければ、気の利いた言葉を並べても、聞き手の心には届かないでしょう。人の傷を癒す言葉を求められたら、自分が先に深い苦しみを味わうことが必要です。他の人の間違いを指摘するのはいかにも容易なことです。しかし、涙ながらにそれをするのはなんと大変なことでしょう！

8月14日

何事かを自分のしたことと考える資格が私たち自身にあるというではありません。私たちの資格は神からのものです【2コリント3:5】

神にはなすべき仕事があります。それは、あなたや私の仕事ではなく、どこか特定の教団、特定の教会団体の仕事でもありません。神ご自身の仕事なのです。パウロはかつて、自分はある責務、役割のためにキリスト・イエスに捕えられたのであり、それを自分のものにしたいという願いを口にすることがあります。こう考えることができます。主イエス様は、各自に与える目的をもって私たちひとりひとりを捕えられます。私たちは、他の者ではなく、自分だけに与えられた目的のためにだけはたらくことを願っています。主は私たちの日常を引き受け、進んで主とともに働けるよう手助けしてくれます。

それでも、あらゆる面で主のものでしかない働きを、自分だけでやり遂げることは絶対にできません。私たちは主の同労者として参加しているに過ぎないのです。時には、神の目的を果たすために、自分では指一本を持ち上げることができないことに気づきます。それでも、私たちには神の『協力者』という地位が与えられていることは確か

です。この謎を思うとき、私たちは聖霊の資格に、身を投げ出すしかないので。

8月15日

バルヨナ・シモン。あなたは幸いです。このことをあなたに明らかに示したのは人間ではなく、天にいますわたしの父です【マタイ16:17】

ペテロがヨナの息子であると、ここで、主が明らかにしたのは、奇異なことと思われるかもしれません。ペテロの人間としての父の立場は、どうなるのでしょうか？ペテロに、イエス様が誰であることを教えたのは天にいる父です。ペテロがはっきりと受けた光は、人間による導きや洞察によるものではありません。少なくともこの点では、ペテロのこの世での父は、何の意味も持たないようです。

もしかすると、ここで、イエス様にはペテロー人を特別に選び出すという目的があったのかもしれませんが。このシモンは、他の誰でもなくヨナの息子であって、その上に神の光が当てられていました。キリストがこのように啓示されるときは、いつでも一人ひとりの心の中に現れます。教会は、お互いから模倣し、教えあう人々の集団ではありません。ペテロのように、天なる父と直接に会い見えた経験を持つ人の集まりです。

8月16日

あなたの神、主であるわたしが、あなたの右の手を強く握り、「恐れるな。」と言っているのだから【イザヤ41:13】

必要を満たしてくれる、『私たちの父』としての親密な関係の中で神を知ることはひとつのあり方です。更に進んで、永遠なる父としての神、天地万物の源であり創造主という捉え方もできます。何者も、神を妨げることはできないし、神を助けることもできないことを学ぶべきです。神は万能です。

神が、恵みと言う贈り物をくださるまで、私たちの手は空でした。恵みをいただいた後、私たちの手はいっぱいとなり、心は賛美で満ち溢れました。しかし、いつの日か、神は自らの手を伸ばし、友人のように、私たちの手を取られます。その日が来たら、私たちは空の手を差し出さなければなりません。私たちの手は空いているでしょうか？私たちが神から受けた贈り物はどんなものでしょう？それを自分の手で育ててきたのでしょうか？霊的な備え、すなわち、日々のパンである『私たちの父』のことで、心を占められるあまり、それを下に降ろして、手を神のために空けておくことができなくなってしまうでしょう

か？贈り物と経験はもう手から放し、神に近づきましょう。贈り物と経験は、役目を終えたのです。しかし、神ご自身と離れていることはできません。

8月17日

花嫁は、光り輝く、きよい麻布の衣を着ることを許された【黙示録 19:8】

私たちには誇るべきものは何ともありません。外を見ても、内を見ても、完全にきよいものは何ひとつありません。自分のことを知れば知るほど、自分がどれだけ汚れているかを目の当たりにします。私たちにできる最善の行動、最善の考えにも、きよくないものが混じっています。きよめることなしに、白くなることはできません。

しかし、ここで上着は、白いだけでなく、光り輝き、きよいと書かれています。白いというだけでは、ただ鈍く、淡く、ありきたりとなる傾向があります。このため、私たちも良いものではあっても、神の輝きに欠けることがあります。神は、私たちにきよく、また、光り輝いているという両方を求めておられます。ところで、聖書の中で、艱難と栄誉は結びついていることが多くあります。これは、イエス様が苦しみと死によって、栄光と栄誉という冠を受けたためです。ですから私たちは、困難を恐れてはなりません。私たちが輝くのは、苦難の日です。

8月18日

むかし神に望みを置いた敬虔な婦人たちも、このように自分を飾って、夫に従ったのです【1ペテロ 3:5】

聖書の中で、『敬虔な男たち』という言葉は何度も出てきますが、私の記憶では、『敬虔な婦人たち』に直接、ふれているのはここだけです。このような言い方をしているのは興味深いことで、神の目から見て高価なものは何かを考えさせられます。ここでいう、柔和で穏やかな霊という飾り(4節)は、なぜ、神の目にここまで価値があるのでしょうか？もちろん、その魅力は、イエス様の美しさから来ているです。

女性がきれいに着飾っていながら、醜い気性が現れているのは、実に見苦しいものです。使徒は、キリスト者の女性が、不注意に、また、無頓着に着飾ることを決して望まず、最大の美は、人格の美しさであることを、さりげなく気づかせようとします。さらには、心の美しさを一度、身につければ、それは崩れ去ることはありません。

8月19日

見よ。あなたの王が、あなたのところにお見えになる。柔和で、ろばの背に乗って【マタイ 21:5】

主イエス様は、私たちが柔和であることを求められます。主ご自身はなんと柔和だったことでしょうか！自分で王であることを伝えるために、尊大に振舞うことをせず、ろばの背に乗って、身を低くされたのです。主がこの世界で生きていた間、いつ、誰でも主のそばに行き、話しかけることができました。私たちもそうであるべきです。キリスト者は超然とした態度を取らず、誰でも気軽に近づける人でなくてはなりません。

柔和な性格を持つとは、いってみれば感情を抑えられることです。腹を立てることはやめましょう。優しさが人間の感情のなかで最も優美なものであり、反対に、粗暴さや激昂は、もっとも醜悪です。神の御子は無礼に振舞ったことはありません。尊大さを見せたこともなく、自分の高貴さを認めさせようとしませんでした。主はこの地上で謙虚に生きられました。そして、神は私たちに同じことを望んでおられます。すなわち、へりくだって主が歩いた柔和と言う道を歩くことです。

8月20日

今がこの世のさばきです【ヨハネ 12:31】

新約聖書の中で、世界(kosmos)と言う言葉が、世(world)の代わりに使われるとき、それは物質的な宇宙とそこに住まうものに加えて、この世の出来事、この世のあらゆる物事の輪、豊かさ、強さ、楽しみなどもさしています。そういったものは、空疎で、すぐに消え去るものでありながら、私たちの欲望をかき乱し、神から離れるよう誘いかけます。アダムが扉を開けて、神が創造された世界に、悪を入れてしまった時から、この世界の秩序は、それ自体が神に敵対するものとなってしまったのです。

イエス様が、審判の判決がくだされたと述べるときは、物質世界とそこに住むものが既に審判を受けていると言われるものではありません。彼らの審判はまだ先です。ここで裁かれるのは、組織、調和を保っている世界の秩序であり、それはサタン自身が作り出し、今も支配しているものです。聖書はこうして、私たちを取り巻く世界への理解を深めてくれます。物質的なものの裏にある、サタンの目に見えない力に気づかなければ、今にもその力に引き込まれてしまいます。

8月21日

勞し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き
…【2コリント 11:27】

これは、本物の神の人が語ることばです。神の御国は、『靈的』になりたいだけの人の怠惰な行いのせいで、ひどく苦しんでいます。そんな人は祈りと聖書の勉強で忙しく、自分の靈的な必要にしか関心がありません。主に属する人々は、肉体面での必要以上に、靈的な必要も主が満たしてくださると信じており、神に与えられた働きをやり遂げることに、現在の自分のすべてを捧げています。

靈的ないのちは、靈的な働きのためにあります。その奥義は、靈的ないのちをいつも、他の人へと流し続けることにあります。私たちは飢えさえも喜んでしので、神が望むことを成し遂げるべきです。靈的な食べ物は、主の御心を行ってれば事足りることを喜びましょう。人が欠乏するのは、自分のことで精一杯になっているときです。父の御心を行うことで手一杯の者であれば、自分が永遠に満たされていることを見出すでしょう。

8月22日

ヤコブはひとりだけ、あとに残った。すると、ある人が夜明けまで彼と格闘した【創世記 32:24】

格闘したのはヤコブではなく、神が来られて格闘したのであり、それはヤコブを完全に降伏させるためでした。格闘する目的は、人が動くこともできないほどに打ちのめし、勝者の前に屈服させることにあります。ヤコブは誰にも負けないほど強かったのに、神は彼を倒しました。ヤコブが降参しなかったので、神は、『彼を打ち』ました。一度、打っただけで、神は、どれほど大きな力をもってしても成し得ないことをされました。

腿とは体のうちでもっとも強い部位であり、肉体の強さが集中するところです。あなたや私の強いところは、ヤコブの強いところとは全く違うかも知れません。私たちがそれぞれ野望、うぬぼれ、自己愛を持っていますが、それを切り離すことは、自分を否定するつらい経験となるでしょう。ヤコブは敗北したように思えたのに、神は、ヤコブが勝ったと言われたのです。これこそ、私たちが降伏し、神の足元に打ちのめされた時に起こることです。

8月23日

すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところにきなさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます【マタイ 11:28】

主イエス様はどのように私たちを休ませてくれるでしょ

う？主は変わることなく、ご自身を私たちの前に現し、『私はへりくだっている』と言われます。へりくだっているとは、柔軟であることです。へりくだっている人は、神が願うものだけを持つと、断言することができます。主が決められたのであれば、何かを本当に持っているか、いないかは、どうでもいいことです。神の御心であるそれを持っていれば、感謝に満ちて、ハレルヤを歌うことができます。しかし、神の御心であれば、持っていなくても、やはり、同じようにできるのです。

へりくだっているとは、自分で決断したことも、主はいつでも、変えられることを意味します。神は自由に、あなたの心を変えられますか？あなたは、神が自分を愛していると語りましたが、頼んだものを主が与えてくれなかったからといって、思い悩んでいませんか？どんな時も、ハレルヤを歌えますか？人がへりくだっているとは、神が望めば、すぐにも進む方向を変える気持ちでいることです。心を新たにすることを神が望めば、それが何であれ、その人は言われたようになります。そのような人は完全に休息をいただいています。

8月24日

愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです【1ヨハネ 4:7】

神の子供たちの中にあるいのちは実に富んでいるので、キリストにあるすべての兄弟姉妹を愛することができます。そのような愛は、おのずから生まれる神の御霊の実です。一人の兄弟を愛することと、すべての兄弟を愛することの違いはありません。多くの者に示す愛と同じ愛が、ただ一人にも示されるからです。一人を愛するのは、ただその人が兄弟だからであり、大勢を愛するのは兄弟たちだからです。人数が多ければそれだけ意味があると言うことではありません。現された愛は『神の愛』です。兄弟の愛とは、すべての兄弟たちに向けられる愛です。

その愛に反することをしないように気を配りましょう。傷を受けたために、兄弟への愛を失うことがあってはなりません。そうなれば、とても悲しい結果になります。神は、私たちの人生の道筋に多くの兄弟姉妹を置かれ、今ここで、愛する対象とすることを求められています。こうすることで、労苦に満ちた、現実的な私たちで、神への愛を確かめる機会を与えてくれます。神への愛を誇ってはいけません。ただ、兄弟たちに愛を示すことを学びましょう。

8月25日

私たちは、自分が死からいのちに移ったことを知っています。それは、兄弟を愛しているからです【1ヨハネ

3:14】

多くのキリスト者は、正しいもののために、忠実さを持って立ち上がりますが、その態度のかたくなさのために、愛に背いてしまいます。そのような人は、義の追及に取り付かれるあまり、十分な善行を行っていないのです。確かに、キリスト者として、私たちは神の義に関して、妥協すべきではありません。しかし、同時に、他者と競い合うことも間違っています。

男と女は愛によって結びつくのであって、敵対者がいるからではありません。人と触れ合うときは、相手の気持ちを傷つけないようにしましょう。あなたにとって、神に従い、神のご命令を軽視しないことは、確かに大切です。しかし、このために自分の信仰仲間に悪い態度や言葉を投げかけて、怒らせることがあってはいけません。あなたの中に、頑迷すぎるところがあれば、へりくだった、柔和な心でそれを置き換えるべきです。こうすることで、多くの人が主の元へと惹きつけられます。かたくなさは人をはじき返しますが、愛は人を惹きつけます。

8月26日

サムエルは言った。あなたは、自分では小さい者にすぎないと思っはいても、イスラエルの諸部族のかしらではありませんか【第1サムエル 15:17】

サウロがイスラエルの王国に召されたのは、ただ民衆が王を与えて欲しいと願い続けたからに他なりません。サウロは背が高く、見た目もよく、ほとんどの国民から、そのまま支配者として受け入れられる人でした。その資質について疑問はありましたが、神は、サウロに必要な手立てをすべて整え、繁栄させ、祝福しました。

しかし、言うまでもなく、サウロは試される必要がありました。誰の目にもはっきりと、神にもてはやされているように見えても、実は試されていることがあります。神に大きな助けを受けた者は、もっともへりくだった者であるべきです。しかし、時にその反対となってしまうのです。サウロの場合がそうでした。サウロは、信仰と服従、どちらの面でも失敗しました。根本的にはその失敗はうぬぼれのせいでした。サウロは困難な時期にはへりくだっていません。しかし、支配者としての成功が彼を短気、無遠慮、醜い嫉妬へと導いてゆきました。私たちがどれだけ小さな者であるか、いつでも神が教えてくださいますように！

8月27日

なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神から

のことばを語ったのだからです【2ペテロ 1:21】

パウロが、ある言葉と視覚的な表現を、何度も繰り返して用いていることに気づきましたか？ペテロ、ヨハネ、マタイはその言葉とイメージを一度も使っていません。ルカが福音を独自のかたちで構成し、また、マルコも自分で組み立てているのがわかりますか？ある書では、憐れみのために投げかけられた言葉が、他のところでは、人の必要を満たすために使われています。聖書の一冊一冊には、作者の明瞭な特徴が表れていますが、それでも、すべてが神の言葉です。

このことが、私たちを励ましてくれます。神がそうしたいと思われたら、ロバでさえ、役に立ちます。実際に、神はロバを通して、バラムに語りかけたのです。しかし、ロバは神の言葉が自分の口に上ったときにだけ語り、神が去った後、ロバだけが残りました。感謝しましょう。あなたを選んだ神は、ご自身の言葉を理解して、それを生かした上で、自分が大切と思う部分を強調することを認めてくださっています。あなたが弱く、恐怖に震えているとき、その言葉を神のために語るように召されているのです。

8月28日

わたしは、あなたがたに平安を残します。わたしは、あなたがたにわたしの平安を与えます【ヨハネ 14:27】

神は、ご自身の中に、決して乱されることのない平安を保っておられます。パウロが語るように、その神の平安こそが、私たちの心と思いを、護衛してくれます。『護衛』という言葉は、武装した衛兵たちと戦わなければ、敵は門を破って、私のところに到達できないことを意味します。衛兵たちを倒してはじめて、私に手をかけることができます。だからこそ、私は神のように平安であろうと願うのです。神を守る平安が、私を守っているからです。

キリストの受難の前の夜のことを思い出してみましょう。すべてがおかしくなっているように思えました。友が自分を裏切るために、夜の中に、出てゆきました。怒りに任せ、剣を抜くものがあり、周りにいた人たちも、関わり合いになりたくないと言わんばかりに、身を隠してしまいました。そのような最中であって、自分を捕らえに来たものに、イエス様が投げかけたのはただ、『それはわたしです』という言葉でした。主は、取り乱すこともなく、静かな平安に満ちて、こう言われたので、むしろ、相手のほうがおののいて、後ろに下がったのでした。ですから、パウロがこの平安は人に理解できるものではないと語ったことは、驚くには値しません。

8月29日

あなたの重荷を主にゆだねよ。主は、あなたのことを心配してくださる【詩篇 55:22】

建物を作っている現場で、3段の足場を組んで、作業する人がそれぞれの段に立ち、一番下の段から真ん中の段へ、そこから一番上の段へとレンガを投げ上げていくのを見たことがありますか？レンガが、上に渡され、また、ひとつ上の段へと、手渡されていくなら、作業は着々と進んでゆきます。途中にいる人が、受け取ったレンガを上へ渡さないうちに、次のレンガが上がって来たらどうなるでしょう？もしも、最上段の人がレンガを受け取ることを拒否したら？可愛そうに、真ん中の人はレンガの重みでつぶされてしまうでしょう。

同じことが、気づかないうちに、いつも私たちにも起こっています。第一の問題が起こったとき、それをもっと高い次元に上げることができないと、焦りを感じ、不機嫌になってしまいます。そこへ、2番目、3番目の問題が起こると、私たちは少しずつ疲れ果ててゆき、重圧に押しつぶされてしまいます。回復する方法はとても簡単です。不安に脅かされそうになったらすぐに、重荷を上へと手渡せばよいのです。

8月30日

ですから、私は決勝点がどこかわからないような走り方はしていません【1コリント 9:26】

私たちの体を造られた主は、その体がさまざまな衝動的な欲求を持つことを許されました。しかし、覚えておきましょう。主は、体が私たちの召使いとなるように造られたのであって、主人となるようにされたのではありません。本当にこの通りになるまで、私たちは与えられた主への奉仕を行うことはできません。競争に入る者について、パウロはこう警告します、全てのもが賞を得ることはない。そのために、パウロは、一人一人の競争者が、自分を鍛えることの大切さを強調しています。

キリスト者の働き手の体が、誰が主人であり、その主人に従うべきであることを教えられていなかったとしたらどうでしょう。その場合、日々の平凡な生活の中で、普通ではない命令が来た時に、それに応じることが、果たしてできるでしょうか？主は、神の働きのために、時にそのような命令をすることがあります。パウロは禁欲的だったわけではありません。パウロは、他のものと違って、体は邪魔なものであるとは教えていません。むしろ彼は、信者の体は聖霊が住むところであると言い切りました。それでも、福音を伝えるものとして、目標に達するためには、鍛錬し、自分を鍛えることが大切さであると確信していました。

8月31日

ですから、私たちは、キリストについての初歩の教えをあとにして、成熟を目ざして進むではありませんか【ヘブル 6:1】

キリスト者の生活において、礎をなす真実はほんの少しです。礎とは、ただ一度だけ置かれるものです。しかし、それは、しっかりと据えることが必要です。すなわち、初めの原理が極めて大切です。

現代のキリスト者が犯す間違いは、1世紀のヘブル人が犯した間違いとは全く違うものです。彼らは、礎を据えながら、その周りをまわり続けるだけで、先へ進まないと言う危険に陥りました。一方で、私たちが直面している危険は、正しい礎がまだおかれていないのに、先へ踏み出そうとすることではないでしょうか。今日では、あまりに急いで進もうとしたり、基礎が作られていないうちに、先へと走り出すものがいます。私たちがすべきは、そのような人をキリストのもとに呼び戻すことです。キリストだけが、神に『試みを経た石、堅く据えられた礎の尊いかしら石（イザヤ 28:16）』だからです。使徒たちは、初歩の教えを後にして、先へと進むように人々を促しましたが、私たちは彼らに元に戻るよう求めるべきなのかもしれません。